

女の学校

佐藤愛子



女の学校

佐藤愛子

毎日新聞社



女おんなの学がく校こう

定価 七八〇円

昭和五十二年四月二十五日 第一刷
昭和五十六年六月二十日 第九刷

著者 佐藤愛子

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒二〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五〇〇 大阪市北区堂島
〒八三〇 北九州市小倉北区紺屋町
〒四〇〇 名古屋市中村区名駅

印刷 東京ベル印刷

製本 正文社

女の学校 目次

お正月の過し方 9

スープレの話 13

女のあわれ 18

男が泣き寝入りするとき 22

女がラーメンを運ぶとき 26

若者よ、この親に一掬の涙を！ 30

怖ろしいこと 34

やさしい男とは？ 38

女が見たロッキード事件 42

幸福行きの電車 46

この頃の親心 50

おばけこわい 54

平和日本の喧嘩 58

子の心親知らず 62

コドモはたいへん 66

人生相談は必要か？ 70

食べる 74

女はいい 78

子を叱る 82

無駄は無駄でない 86

少しもふしぎではない

90

お父さん 頑張れ

94

いやアな気持

99

子供のごまかし方

103

勿体ない病

107

子供は知らない

111

人間の愛らしさ

115

まことの女

119

イジワル合戦

123

合理的

127

失ったもの

131

親切について

135

盗人の話 139

本舞台 143

海に想うゝ 147

男のやさしさ 151

分析時代の分析 155

何が敬老の日だ！ 159

祭りについて 163

魅力ある人 167

男の修業 171

娘の値段 175

女の涙ゝ 180

世を生きる知恵 184

疲れたアゝ 188

首魁はいずこ 192

年の話ゝ 196

強くなるとは？ 200

お役所とのつき合い方 204

姑の歌 208

男は女でない 212

慈母 216

装
幀
山藤章二

女の学校

お正月の過ごし方

「今年のお正月はどちらで過ごしですか」と訊かれるようになったのは、この三、四年来のことである。お正月を海外や温泉場やホテルで過ごす人が増えたので、私などもそう訊かれるのであろう。

昔は「せめてお正月はうちで過さなければ」といったものだ。その頃のお正月は一年の出発点であつたから、何でもかでもめでたいめでたいと張り切つた。出発点でグウタラしては、行く先が思いやられるという考えがあつて、やれ初詣、やれ年始廻りと忙しく、子供は子供で羽根つき、凧上げ、スゴロク、かるたとり、福笑い、と遊ぶのに忙しかつた。だがこの頃のお正月は張り切る日ではなく、ノンビリと骨休めをする日となつた。一年中よく働いたので、正月はノンビリ休んで、また新しい年を働こうという息つぎの場になつたのである。休憩の時であるから、年始の挨拶に行つては迷惑をかけるのではないかと思案したり、また年賀客が来るとうるさいから、あらかじめ正月は温泉へ行きます、などと

予防線を張っておいて、実はどこへも行かずに炬燵くたうで寝ている。

たまたま予防線から洩もれた人がいて、何も知らずに年始廻りに出かけ、

「チェッ！ 温泉へ行ってるのになぜ来るんだよっ」

と奥で悪口いわれている。

「お正月はどうでした」

「いや、寝正月です」

「それはお羨うらやまましい」

正月早々寝ているなんていうのは、失業中の書生しやうせいっぽのすることだった。それが今はお羨うらやまましい、だ。

お正月を旅先で祝う人の中には、

「これも女房孝行のひとつだね」

という人がいる。

過去のお正月は男と子供の天下。お正月の賑やかさ、楽しさは主婦の立ち働き、その犠牲によって成り立っていた。この不平等をただすために、夫も一緒におせち料理を作るわけにはいかないから、旅に出てしまおう、という考えである。

しかし、遠くへ行くには時間とお金がかかり過ぎるからというので、町中のホテルに部

屋を取って、ぼんやりとお正月を過す。テレビを見、ロビーでコーヒーを飲むとあとはすることがない。お腹が空いたら食堂へ行けばよい。掃除、洗濯に明け暮れている主婦にとっては、「命の洗濯」が出来たような気分になるのは最初の一日だけで、二日目には、することがなくて手持無沙汰になって来る。手持無沙汰になるとつい、このホテルの食事、まずいわりには高いわねえ、というようなことが頭に浮かぶ。

考えてみると、何だかずいぶんつまらぬ浪費をしたような気がする。正月の食品がいくら値上りしたといっても、このホテル代のことを考えたら、大ご馳走が作れたわ……洗濯モノは全部、クリーニング屋に出しても、このホテル代のことを思えば……と後悔がむらがり起り、夫がホテルのバーへ行っては飲んで来る酒代までシャクのタネになって来る。

「お正月はホテルへいらしてたんですってねえ。羨ましいわ」

とひとから羨望されても、どことなく浮かぬ顔。

——ああ、あのお金で訪問着買った方がよかった……などと後悔は募るばかり。

「日本の主婦が真の自由、男との平等意識を身につけるためには、まずその内なるケチ根性、クソ現実主義、ソロバン、家計簿より解放されねばダメよ……」

と叫んでいた進歩女性がいたけれども、悲しいかな、解放されたくとも財布、家計簿の方で解放してくれぬ。まだまだ我々は貧乏日本を生きて来たその歴史の殻から脱け切るこ

とが出来ないのである。

ところで我々の先輩女性にとって、果たしてお正月は苦痛に満ちた地獄の時であったのだろうか？ そうではなかった。

お正月は忙しい。その忙しさが、女にとっていかにもお正月が来たという、いそいそ生き生きとした楽しみになっていた。お正月は女の力の振るいどころでもあった。その女の腕によって男、子供が楽しみ、賑やかに喜んでいる。それが主婦の喜びであった。

忙しく働くことをつまらぬことだという最近の女性の思想は、どこから来たものであるうか。己れの犠牲を犠牲と感ぜず、それによって喜ぶ人の喜びを自分の喜びと感ずることが、なぜつまらぬことなのだろう。

どうもこの頃の主婦は怠けることに意義があり、不平文句を探すのを女の甲斐性と思っているふしがある。しかしそれが果たして女の幸福につながるのか、不幸につながるのか、私にはよくわからないのである。

スープの話

私の娘は今、高校一年生である。

一年前までは学校から帰って来ると、必ず、

「ママは？」

といいつつ靴を脱いだ。しかし、高校へ行くようになってから、いつとはなしに「ママは？」とはいわなくなった。

「ただいま」

といって、そのまま二階の自分の部屋に入ってしまう。そんな娘を見ると、私はそろそろ覚悟しなければ、という気持ちになる。娘は私の手から少しずつ離れはじめているのだ。離れようとしてそうしているのではなく、彼女自身、気づかずにそうになっている。そうして、やがて今に「ただいま」ではなく、「こんにちは」といって入って来る日がやって来るのであろう。

ある日、娘は突然、私に質問した。

「ママ、私がボーイフレンドとキスしたらどうする？」

「どうするといわれてもねえ」

と私は絶句した。我が娘は時々、突拍子もなくこういうことをいい出す娘である。

「ママは怒る？」

「怒ったってしようがないけどねえ。しかし、そういうことはあんまりあせて早いところやらない方がいいと思うよ」

「なぜさ？ なぜキスしてはいけないの？」

「いけないということはないけれど……」

と私はシドロモドロである。

「ないけれど、なに？」

「テキはしつこい。」

「高校生だって、みんな、してるのよ。キスしたからって、べつに減るもんじゃなし。赤ちゃんが出来るわけでもなし」

「それはそうみたいだけど、あんまり早まってしまって、あとで後悔することがあると困るでしょう」